No.138
公民館だより
平成22年3月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

# どのくらい知っていますか？

由良地区公民館長　枝川隆亮

方言は、その地方の「言葉の文化」であると有名な言語学者が言っています。

方言とは「或る地方だけで使う共通語と異なる単語」と広辞苑は説明しています。由良の方言は今はすっかり使われなくなりました。方言は決して田舎くさいものではありません。

由良の歴史をさぐる会発行「由良の歴史第2号」一九八一年（昭和56年）12月の中で川崎徳雄さん（浜野路在住）が掲載をされていますので了解を得て一部を紹介します。

## 由良の方言

川崎徳雄

いま、方言は風化されようとしている。生活全般の多様化と広域交流で村は埋没しようとしている。言葉の栄枯盛衰は存在し、若い世代は言葉の標準、画一を思考する。由良の方言についても、すでに死語、廃語があるのではなかろうか。そんな発想から、とりあえず方言採録の初回版を地元に問うことにした。（ここに収録したものの中には、訛り、いわゆる由良独自の訛語および当地方の類語を包含している。）

| | 方言 | 相当の標準語 |
|---|---|---|
| あ | あかる | (雨)がやむ |
| | あかん | だめ |
| | あわさい | すきま |
| | あんだけ | あれだけ |
| | あさま | 朝のあいだ |
| | あほげに | 馬鹿らしく |
| | あんばよう | 塩梅よくの転化 |
| | あんじょう | あじよくの転化 |
| | あんたらあ | あなたがた |
| | あなずる | あなどる |
| い | いかめい | うらやましい |
| | いこまい（か） | 行こう（か） |
| | いっつも | 何時も |
| | いわえる | 結びつける |
| | いごく | 動くの訛 |
| | いこす | (火)をおこす |
| | いらう | いじる |
| | いれもん | 入れ物 |
| | いんきょ | 分家 |
| う | うでる | 茹でる |
| | えら | 裏道 |
| え | えがむ | ゆがむ |
| | おっけい | 大きい |
| お | おっとろし(や) | 恐ろしい（仰天した時） |

| | 方言 | 相当の標準語 |
|---|---|---|
| あ | おおれきょうとや | おったまげた |
| | おおけに | おおきに |
| か | おやこ | 親戚、親類 |
| | おかいさん | お粥 |
| | かなん | かなわない |
| | かなさいづち | かなづち |
| | かいさま | 反対 |
| | かいな | 腕 |
| | かげる | 太陽があたらなくなる |
| | かったいぼ | 片方 |
| | かったる | 仲間に入れてやる |
| | かばち | あがりはな |
| | がんど | 鋸 |
| き | きんのう | きのう |
| | きゃあこ | 蚕 |
| | きなどり | 餅搗きの相手 |
| | きばる | がんばる |
| | ぎょうさん | 沢山、おおげさ |
| く | ぐずる | せびる、ねだる |
| | くるぶく | うつむく |
| | くすべる | いぶす |
| け | けなりい | うらやましい |
| | けんびき | 肩のすじ |
| | げんくそ | 胸くそ |
| | げと | しんがり、びり |
| | げな | そうな |

| | 方言 | 相当の標準語 |
|---|---|---|
| こ | こうりょく | 手助け |
| | こんだけ | これだけ |
| | こばる | がまんする |
| | こうこ | 沢庵漬 |
| | こかす | ころばす |
| | こんだ | こんど |
| | ごっつお | ごちそう |
| さ | さぶい | 寒い |
| | さなぼり | さなぶり（田植え終了の祝い） |
| | さいさい | たびたび |
| | さかとんぼ | さかさま |
| | さぶいぼ | 鳥肌 |
| | さんにょう | 計算 |
| | さらかご | 苗などを運ぶかご |
| | しんきい（くさい） | わずらわしい |
| し | しゃっても | ぜひとも |
| | しもた | しまった |
| | じょうり | 草履 |
| | じるい | 湿っている |
| す | すこい | せこい、ずるい |
| | すいばら | とげ |
| | すまんこ | すみっこ |
| | すくも | もみがら |
| | すこっと | こっそり、だまって |

| | 方言 | 相当の標準語 |
|---|---|---|
| す | ずいきも | さといも |
| | ずいたんぼ | ずぶぬれ |
| | せばい | せまい |
| | さいなあ | しなさい |
| せ | せんぐり | 先繰、次々に |
| | そしてなあ | そうして |
| そ | そうじゃなあ | そうです |
| た | たらかす | すかしなだめる |
| | たんの | 堪能、満足 |
| | たんまに | 稀に |
| | だんない | かまわない |
| | だがい | 私の家、うちとこ |
| | だあ（ら） | 自分のこと |
| ち | ちびたい | 冷たい |
| | ちぎ | はかり |
| | じべた | 地面 |
| つ | つべくる | つめくる |
| | づんばら | 芳花、つんばな |
| て | てま | 遊戯の時に一寸と休む |
| | てばる | 無理になる |
| | てんこもり | 山盛り |
| と | でんでらこ | おたまじゃくし |
| | でぼちん | おでこ |
| | といい | 遠い |
| | どぼづけ | ぬかみそ漬け |
| | どんけつ | しんがり |

| | 方言 | 相当の標準語 |
|---|---|---|
| な | なつべる | しまう |
| | なんぞう | 間食物 |
| | なんじゃらいや | なんですか |
| に | にどいも | じゃがいも |
| | にぶたい | ねむたい |
| ね | ねえさん | 目上の女性への呼び かけ |
| の | のぐ | 脱ぐ |
| | はしかいい | いたがゆい |
| は | ぱん | めんこ |
| ひ | ひいさ | しばらく |
| | びしょったれ | ずぶぬれ |
| ふ | ふなび | 桑の実 |
| へ | へえこきむし | くさがめ |
| | へたる | すわりこむ |
| | へえから | それから |
| | べた | 荷馬車 |
| ほ | ほんなら | それなら |
| | ほかす | 捨てる |
| | ほところ | 懐 |
| | ぼう（ぼいかける） | 追う（おいかける） |
| め | みそたれ | みぞれ |
| | みぞこ | みぞ、下水 |
| | むくる | むく、はぐ |
| | めぐ（めげる） | こわす（壊れる） |

| | 方言 | 相当の標準語 |
|---|---|---|
| も | もおり | 子守り |
| | もの | できもの |
| や | やっと（やあと） | 沢山 |
| | やめく | わめく |
| | やる（やろ） | あげる（あげよう） |
| | やぐさい | こげくさい |
| よ | ようけ | 余計、沢山 |
| | よだち | 夕立 |
| | よばれる | ご馳走になる |
| わ | われ | 君 |

原文は、ほぼ倍ほどありますが一部を紹介しました。

このように由良地区にはたくさんの方言が残っています。

冒頭に述べましたが、「言葉の文化」である由良弁を私たちの時代で絶やすことなく後世に伝えてゆきたいものです。

絵：みもり　あきら

# 行事報告

主事　磯田充亮

**◎十月十八日（日）**
**グランドゴルフ大会**

第四回目の大会となり、行事も定着しつつあります。今後も御協力お願いいたします。

今回は14組84名の参加で午前午後二回団体戦を行ないました。

8ホール二周16ホールの合計打で競いました。

成績

○ホールインワン16回　（15名）
○個人最小打数　41打
○個人最多打数　69打
○団体優勝

午前、松原寺世話人会287打
午後、宮本ヴィクトリー　310打

他に午前午後、男女別に成績優秀者に賞状賞品をお渡ししました。

（個人の成績は回覧「公民館がいど」で報告済み）

**◎十一月三日（火）文化の日**

今回も由良婦人会と共催で、開催しました。

今回は、作品・バザー・うどん寿司コーナー・お茶会席に加え、特設として子供地蔵盆が10周年を迎えたことで、記念写真のビデオ放映がありました。

子供達はなつかしい顔々を見るたび賑やかに歓声をあげていました。

作品は力作が並らぶ中、木工の水車小屋、園児の陶芸、中学生の石刻印等の新作が展示されました。

今回は286名の応募があり展示品は昨年に比べ36点多い334点ありました。時々冷たい風が吹く肌寒い中約500名の方が訪れました。

内訳は
習字（書道を含む）45点
絵画（ポスターを含む）92点
写真　33点　生花　25点
ちぎり絵　22点
等、工作、パッチワーク、研究発表、砂絵等がありました。

**◎十二月十九日（土）**
**「子供のびのび体験活動」**
**子供料理教室**

今回も宮津市食生活改善推進委員協議会（食改）の皆様の指導を受け、由良子供会連絡協議会共催で実施しました。

小学生24名園児4名の計28名で5班に分かれ、六年生が班長となり、クリスマスケーキ作りに挑戦しました。

協力し、手作りのホイップクリームを使いバナナ、イチゴを飾り、経験を生かし、立派な三段かさねのケーキができました。

食後、子供達は卓球と外で雪と戯れる者に分れて遊び、親交を深めていました。活気あふれる元気な姿を見ました。

**◎一月十七日（日）**
**新春公民館囲碁大会**

例年どおり由良囲碁同好会の協力を得て開催しました。

参加者11名で初段以上（A組）一級以下（B組）に分かれリーグ戦を行ないました。

結果は次のとおりです（敬称略）

A組　　B組
優　勝　渡邊嘉三郎　磯田充亮
準優勝　熊田良雄　三嶋安夫
三　位　中西　衛　木村卓雄

今年は囲碁教室に通っている中学生栃田佳大君の参加があり上級者相手に頑張ってくれました。将来が楽しみです。

**◎一月九日（土）**
**卓球教室開催**

生涯スポーツの普及と健康づくりの一環として冬場に適した運動として開催しました。

今年も三月末まで開催、気楽に参加して下さい。

（毎月第二、第四土曜日、午後開催）

**◎一月二十三日（土）**
**生涯学習講座**

今年は京都府立海洋センターから海洋調査部長・中路実、海

洋生物部長・傍島直樹両氏をお迎えし講演を行ないました。
主な内容は次のとおりです。

○中路講師
題名「環境の変化と丹後の海、漁業」

一、海の水温はここ百年の間に世界の平均は0.5度上昇に対し、日本海南部中部では1.3～1.7度上昇し世界的に異常な現象がある。

二、近年、魚は産卵のため東シナ海に帰らず近海で越冬し繁殖している。最近はサワラが大漁に獲れ、ブリは北上している。又、南方で生息するトゲシャコが若狭湾で定着している。

三、エチゼンクラゲ、ハイセンボンが大量発生し漁業に影響を与えている。

四、海の変化を調査船「平安丸」で能登半島沖まで調査し研究している。又、市場で水揚げされた魚の調査もしている。

五、昭和36年頃京都府はマイワシを中心に十万トンの漁獲があったが、今はサワラ、ズワイガニ等で一万五千トンに減った。小さな漁港だが種類が豊富なことで評価は高い。

六、定置網と底引網の漁法があるが、底引網は魚貝類を根こそぎ獲り自然を破壊する。実は期間外にカニが獲れる、逃がしはするが、水温が高いため死ぬ。その保護のためカニの入らない改良型の網を作った。又、ズワイガニの餌になるヒトデも獲らないようしている。

七、京都府は昨年秋、環境に配意した底引網漁法に国際的認証「MSC」通称海のエコラベルを獲得し、市販の魚等に張り販売されている。買ってほしい。

○傍島講師
題名「宮津の新しい水産物」

一、トリガイは人工育成で一年で天然物の10倍の大きさになる。

二、海洋センターでは春に受精卵を作り七、八月ごろ一センチ位に育った貝を業者に渡す。

三、業者は特殊な砂の入ったコンテナに貝を入れ、食害を防ぐため網目の蓋をしてイカダに吊し育てている。定期的に砂や網を掃除して翌年六月に出荷する。昨年は12万個生産した。

四、貝に年輪みたいな障害輪が付いている。掃除をするたびに付く。手入れが行き届いている証拠。（天然物には付かない）

五、貝の身六枚で五千円位と高価だが、料理は簡単にできる。機会があれば食してほしい。

六、最近宮津市でもPRしている海藻が「アカモク」。これはネバリがあり、フユイダン・アルギン酸が含まれ、血圧降下、整腸作用があると言われ、ギョウザやご飯にまぜて食べる。

七、次に海藻「フコイワズタ」。沖縄地方で「海のぶどう」として食べている。つぶつぶの食感が味わえる。

これらの海藻を育成している。

○主な質疑応答

Q、海洋高校との連携は、

A、最近ではエチゼンクラゲが入らない網を共同開発した。生徒を職業人として育成してほしいとの要望で貝類の養殖、加工等を教えている。又、阿蘇海の環境改善に魚貝類等の分布調査を協同で取組んでいる。

Q、アジ、サバ等大衆魚はどこへ行ったか。

A、環境の変化か人間が乱獲したのか原因は判明しない。まさしく我々の研究課題である。他にエチゼンクラゲの食物化と毒性や、奈具海岸で釣れる魚種等の質疑がありました。

最後に地産地消と言われているように宮津の魚貝類等を食べ漁業を応援してほしい。海洋センターの仕事はインターネットで公開している。見てほしいと要望がありました。

以上、簡略に報告します。プロジェクター使用で分かりやすく理解できました

# 体験が育てる本物の環境教育

由良小学校校長　山本文雄

私が自然との遊びが大好きなことは、これまでにも書いてきたので由良の公民館だよりを読んでおられる方にはわかっていただいていると思う。

今回は子どもの頃からの夢であった鮭とりが実現したことを書きます。

秋になると由良川にも鮭があがってくる。

福知山市の牧川では、そ上してきた鮭を人工孵化させ、放流をしていることが毎年のように報道される。

宮津の大手川でも鮭はそ上してくる。

日置の世屋川にもそ上してくる。

北海道や東北地方の川に鮭がそ上してくる報道やテレビの映像で鮭が産卵のために川をあがる映像を見るのが好きである。

実際に自分の目で見たいと思っていた。

天然のアユも毎年のようにそ上してくるが、アユは何十年も前から捕獲経験はある。

鮭をとることは長い間の夢だったんです。

それがかなったのです。

平成二十一年の秋、私五十七歳の時。

母の死後、土日には畑に行くことが多くなり、母の植えたズイキイモの収穫を、大阪の友人に手伝いをお願いし、来てもらった。

イモの収穫をしていて少し休息をとることになり、友人は大雲川をのぞいていた。

友人は、土手道に沿って上流にいったり下流にいったり、忙しく動いていた。

「大きな魚がいる。」

と話しかけてきた。

友人は捕獲する意思などなく、ただ大きな魚がいるということだけなのです。

私はイモの収穫に集中し、その魚が鮭だとは知らずに仕事を続けていた。

気になり土手に上がって川をのぞいた。

「あそこにいる。」

そこは川を関止め井根となっているところで、少し深く、アユもそこで大きく育つ場所で、捕獲もしやすいところである。

私は、その魚が鮭とは確認せず、いそいで大きな網と投網をとりに走った。

もどってくると、魚はどこかに逃げてしまっていた。

友人は、あきらめずに川に入り、いそうな所をガサガサと棒でつついたりしてさがしていた。

私もイモをほったらかし、長ぐつをはいたまま、ズボンをはいたまま、ひざ上までつかりながらさがした。

「お父さん、ここにかくれています。」

「よっしゃ！　ほんなら君、上からぼうてきて。」

私は、下流の川幅がせまくなったところに、投網を広げ、その中に入ってくるように、網の横を石とかドロで補強し、まちかまえているようにした。

友人は、上流から棒をたたき足と体でジャブジャブ音を立てぼうてきた。

私は投網から離れた草陰に魚にみつからない所で、じっと待っていた。

友人が網から五メートル近くまで来たとき、魚は投網があることなど気がつかず、一直線に網につっこんできた。

私は服を着ていることなどかまわず、魚が網から逃げないように、ダイビングキャッチをした。

私は、アユとりでも、ガシラつりでも、型が大きな物がとれ

ると、あわててしまい、ビクに入れるまでに逃がすことがよくある。

この魚は、アユやガシラの何倍もある。そのうれしさや、感動は、それはそれは五十七歳のおっさんでなく、七、八才の少年である。

おちつけというのが無理である。大切にかかえて土手にあげた。

バケツもクーラーも何もない。イモを入れるカゴにマルチを何重にもかさね。特製のイケスを作り、長ぐつで水をくみ、水をはり、鮭をおよがした。

かわいそうにイケスは少し小さく、鮭はきゅうくつそうである。

帽子も服もずぶぬれであるがうれしくてうれしくて、携帯電話のカメラで、鮭をだっこしている姿を何枚もとった。

以上　鮭とり

こんな体験を、由良幼稚園児小学生にもいっぱいさせたいのです。

環境問題がさけばれているが要は、自然を守ることだと思う。

守るといっても、本や話で知識を教えても、どうにもならないと思う。

本物の環境教育とは、体験あって、続けて、実践してこそ知識が生かせると思う。

私もアユとり、ガシラ釣り、ドジョウとりと自然とかかわり何十年も継続しているから、環境の変化が肌で感じられる。

大雲川など自分のもののようにかわいがるし、愛着を感じる。

また、大雲川からとっている上水道の味も、季節によって変化するのも舌で感じとれる。

その支流のドジョウなんでドロが大好きであるのに、コンクリート補修する川は、そのドロが、すべて海に流れていってしまっている。

ドジョウはいなくなって、鳥達も少なくなった。

でも、大雲川には、あの美しいブルー色の渓流にしか住まないオオルリに出会えるのです。

肥えた山からの砂、土、くさった腐葉土は、私達人間の食料である動植物を育ててくれているのに、すべて海に流れていってしまっている。

その点、由良は、まだまだ、豊かな自然、たのもしい地域の方がたくさんおられる。

子どもたちは、もっともっと自然の中であそび、その良さを体験し、大きくなったら、由良に住みたい、かえってきたいという子を育てたい。

# 由良診療所開設一年を経て

宮津市由良診療所　堀川義治

早いもので、診療所が開設され一年二ケ月が過ぎました。一昨年春に勤務していた大阪の病院を退職する事になり、60才を前にした〝後期脳神経外科医〟が今後どのようにして生きてゆくのかを決めるという課題が現実の事として生じてきました。いろいろとお話はあったのですが、たまたま与謝の海病院の内藤先生から由良診療所開設の話をいただき、検討する事になりました。大学卒業以来、脳神経外科という狭い領域でしか仕事をしておらず、幅広い医療の知識や技術に欠けるところがありました。だからといって隠居するにはまだ早く、まだもう一つ何か仕事ができる年齢でもあります。しかし私は商売をするには金銭感覚に乏しく、肉体労働をするには年を取り過ぎております。いろいろと考えた結果、医者しか出来ないと結論いたしました。由良の診療所の予定地を見に来たのですが、多

少さびれたとはいえ、海や山に恵まれており、環境として気に入り、経営的な不安はありましたが、この話をお受けする事にいたしました。診療所の運営は経験した事が無く、先輩や後輩で既に開業しておられる先生に相談したり、本を読んだりと情報を集めました。この診療所は由良の住民から宮津市に寄贈された土地に、宮津市が診療所を建てたもので、その運営を私が委託されているという形のものです。診療所の設計から関わらせていただき、色々と希望も言わせていただきました。この間、宮津市を初め多くの方々にお世話になりました。何度も大阪、京都に足をはこんでいただきました。行政的な許可・届けの事、設備の事等についても大変なお世話になりました。診療に関する設備、機器の選定等に際しては、大阪の病院で一緒に働いていた知人から紹介してもらった方に指導、仲介を受け、大変なお世話になりました。一般に診療所を始める際には、コンサルタントと言われる会社と契約し、多額の費用を負担して手伝ってもらう事が多いのですが、私の場合このような負担無くても、より的確かつ有効な援助、助言を受けることができたと思います。一方、開業に先立ち、私自身の知識のリハビリとしては、総合診療と言われる分野の講義を五ケ月間受ける事が出来ました。この際には、大学脳神経外科同期で、現洛和会理事長に大変お世話になりました。このように多くの方々のお世話になりようやく診療所を開設する事が出来た訳です。診療活動を始めてみて感じる事は、まさに田舎の診療所そのもので、何でもありの状況です。高血圧、高脂血症、糖尿病といわゆる生活習慣病のオンパレードに始まり、喘息、腰痛、関節痛ほか今までの病院勤務時代には、それぞれの専門領域の先生に依頼していた疾患・病態が主な対象となっています。肺炎、脳卒中、外傷ほかの入院治療を必要とする急性期疾患の振り分け、通院できない患者さんの在宅診療、癌末期の終末期医療等も診療活動の対象となっております。特に、在宅での継続的な看護、介護を必要する終末期や慢性疾患の患者さんに対しては、訪問看護ステーションの看護師の皆さんの力なくしては活動できないと強く認識させられております。診療所の活動そのものは、単に患者さんの診察業務だけではなく、看護業務、医療事務業務ほかが統合されて初めて可能となるものです。施設の維持管理に必要な業務も必要となり、収益が確保されなければ活動を続けることも出来ません。今までは、病院組織の管理の業務にも関わる機会が次第に増えてはいたものの、診療業務を主に担当しておりました。しかし診療所では、規模は遥かに小さいものの、大枠では病院組織全体が行っていた様々な業務が仕事として要求されてきます。この様なことは私一人の能力を遥かに超えることで、多くの人々の助けがなくては不可能な活動です。当院では目的を共有できる良いスタッフにも恵まれ、この一年何とか活動が出来てきたと思います。現在どの程度地域の人々に貢献できているか不安ではありますが、今後も我々に可能な範囲で活動してゆく予定です。長く診療所活動を継続してゆくためにも、様々な方々と協力が不可欠と考えております。よろしくお願い致します。

絵：みもり　あきら

# お別れのご挨拶

四方寿朗

昨年末、急に体調が不良となり、由良での一人暮らしが困難となりました。年末を目前にして、荷物の用意も心の整理もつかぬまま急遽娘の宅へ転居して参りました。若しかしてこれが最後の由良とのお別れかとも考えましたが、娘宅の都合もあり十二月二十九日小牧へ移りました。

当日は小学校の行事もあり、内々にと思っておりましたのに、多数の皆様のお見送りを頂き恐縮でした。気もそぞろで、まともにご挨拶も出来ず大変失礼いたしました。お許しください。

振り返りますと井土巌が神崎から由良へ招かれたのが昭和六年、私が後を継いだのが昭和三十三年でした。その後五十年は夢のようでした。その間、毎日の診療を始め学校医、地区公民館、由良の歴史をさぐる会、由良運転者協会、四十二の厄除け、還暦旅行、由良スポーツサークル、カメラクラブ、夕月サロンなど、お誘いを受ければ何でもお付き合いいただき、楽しく過ごさせていただきました。

家内は病気勝ちで皆様に特別のお世話になりました。二人の娘も由良の波風を受けて無事育ち、今ではそれぞれ家庭を支え、私の老後の介護も引き受けて呉れるようになりました。何より有難いことです。

早や居候生活一ヶ月余り、今はただ食べて寝るだけの毎日ですが、これまでがむしゃらに生きてきた時々を静かに思い出しています。まだまだ遣り残してきた事、行ってみたい名所など山ほどありますが、欲望の限りはありません。幸い皆様のご親切に甘えてこれまで我侭に生きて来ました。

私が生涯、せめて自分の身近だけでもかくありたいと願っていること

一、自分の良心を裏切らない。過ちは素直に謝る。

一、人は皆平等、性別、学歴、職黄業などで差別をしてはならない。

一、地震や台風などの自然災害は止めることは出来ないが、人間が人間を殺す戦争は人間の努力で必ず防ぐことができる。

以上

この世はそんな甘いものではないことは承知しながら、実現は困難でも理想として生きてきました。これは今も変りません。

一方、私は以前から「人間の脳細胞への血流が止まれば精神作用は一切停止消失する。従がって霊とか怨念など死後の世界は信じることは出来ない。死は生と同じ生き物の生理現象なので、皆が通る普通の道、特別のことではない」と広言して来ました。しかしその時期が身近に迫った現在、思いは複雑です。死線を越えるのが恐ろしく、頭から常に離れません。これまでの経験や思い出が一瞬にして全て失われる寂しさがこみ上げ、残念です。先に行かれた先輩たちはどのように克服されたのでしょうか。少し動くと息切れがする最近の私の症状には、この恐怖が関係しているのかとも考えています。若しそうなら我が身のいざという時の根性の無さが恥かしいです。

縁があり、由良で最後の五十年を過ごさせていただきました。海、山、川、の美しい自然、四季折々に変化する風景、由良岳登山や運動会、敬老会、お祭り、文化祭、厄年や還暦の旅行、その度毎に受けた皆さんからのご好意、思い出は尽きません。まだ遣り残したことは山ほどあります。しかし、先の戦争で心

ならずも死んでいった多くの同年輩の若者の無念さを思えば、バチが当たります。

これまでの病状の推移を考えると、生きて再び由良の地を踏むことは無理と思われます。長い間いろいろとお世話になり有難うございました。名残は尽きません。自然も人の和も由良は素晴らしく良いところです。今後は更に地域独自の振興が肝心です。「誰かが行動を起こさなければ、何も始まらない。思い切って、あなたがその誰かになってください」いろいろ困難もありましょうが、由良が益々美しく住みよい土地であり続けるよう念願しています。

（二〇一〇、二、八）

絵：みもり　あきら

# 四方先生ありがとうございました。

飯澤　登志朗

この度思い掛けず四方寿朗先生から「お別れのご挨拶」をいただきました。

再び健康を回復され元気なお顔を拝する機会が必ずあると期待していましたが残念で堪りません。

四方先生の由良に対するご功績は枚挙の遑がありませんが、四方医院として地域医療の大きな拠り所として安心、安全を与えていただきました。

一方公民館長として11年間地域文化の向上、スポーツ振興に寄与され、その後受け継れた公民館活動は平成14年度全国優良公民館として文部科学大臣表彰受賞として実を結び今日に至っています。

また、由良の歴史をさぐる会会長としての取り組みは、公民館だよりNo、117（平成15年3月）に「由良の歴史をさぐる会」発足三十年を終えて。に見ることができますが、森鴎外文学碑、上田三四二歌碑、蜂子皇子船出の地碑、由良の戸歌碑建立と続き由良山椒太夫伝説旧跡めぐり、由良の歴史、山庄署由来解説、丹後由良散策のしおり発刊とハードにソフトに由良地区の歴史を現代に後世に伝える活動が随所に見られます。

更に庄内由良との交流は、「友好浜の宣言」により相互訪問が行われています。

先人が活躍した北前船の歴史の一端を知るにつけ、海、山、川に恵まれた由良の歴史を次代へ伝える使命は大きな責任であり、四方先生が示された「誰かが行動を起こさなければ何も始まらない。思い切ってあなたがその誰かになってください」。このことを肝に銘じ地域再生に力を合せてまいります。

先生本当におおきに!!

## 第27回　宮津市民卓球大会

平成21年12月6日（日）宮津市民体育館で行なわれました。結果は次のとおりです。（敬称略）

◎団体戦　自治会の部

B級　優勝　由良チーム
三位　浜野路チーム

◎個人戦

一般男子の部
C級　三位　中西一義

一般女子の部
A級　優勝　日比道栄
B級　三位　小林久美子
C級　優勝　藤本早苗

小学生の部
三位　小林美香

**由良岳登山証明書発行数**

平成21年1月1日～21年12月31日まで

**1010枚**

今年に入って（22年2月13日現在）21枚発行されています。

# 『加佐の郷から宮津へ 温故知新での活力を期待する』

中西　六右衛門

始めに、前回四年前に合併の事や当時の現状や将来の事、取り組む為の要望等を書きましたが、状況も大分変化して来た様に思い、重複を知りながらあえて宮津市合併当時の事も書きました。その後公民館、自治会が中心に宮津市へ働きかけ通信がADSLになりインターネット環境が大幅に改善され、無医地区状態が誘致運動と地区民の協力で立派な診療所とお医者さんの派遣が受けられた事は喜びと感謝です。

一方では当時の事を知る方々も減る中で活力に満ちた当時の由良や先人の足跡や生き様を知り残す事も大事と思うこの頃です。当時の事や江戸以降の事をご存知の方は是非公民館へ連絡して書き残しに協力願いたいものです。さて昭和三十年初頭（一九五五年）由良は町村合併にゆれていました。当時の事を知る中で現在置かれている由良を考えてみるきっかけになればと思っています。

合併した後も由良地区として舞鶴に希望を託し、行政は宮津へ、その他は現状を残すことに努力し特に経済面は舞鶴に残しました。一例として金融は京都銀行西舞鶴支店エリアと舞鶴信用金庫に、電力は関西電力西舞鶴営業所、NTTも同様、教育は西舞鶴高校学区に、宗教では仏教は川筋の十七教区、神道は舞鶴加佐神社総代会と神職会に漁業も由良川漁協、食糧事務所も舞鶴加佐、郵政も加佐、鉄道、バスも舞鶴エリア、買い物も殆んど舞鶴、病院も舞鶴の個人及び総合病院、高校生の就職も宮津、舞鶴を問わず殆んど舞鶴エリアへ等々となり、最近までそれが継続し現在も残っているものもあります。その事が由良地区にとってプラスになったかは地区の皆さんが判断される事と思いますが。

その中で一番残念なのは、この合併を期に由良の自治、即ち夢と将来像を描き各自が何をするか、何が出来るか考え行動する自活が消えた事と思います。

ここで、過ぎし昔を振り返りますと、江戸末期から由良は北前船の船頭輩出地区として、結構先進的な経済文化が有った様です。

経済産業面では内陸貿易により、一次と共に二次加工も有り、内陸貿易によって得た原材料を加工し販売して利益を得るうどん、素麺、酒、味噌、醤油、油等の製造屋が生まれ、製塩、由良石の産出加工等も盛んで、それに伴う鍛冶屋、石屋、馬喰宿、商人宿、酒飯屋、舟大工、大工、左官、瓦屋（製造）、屋根屋、等々、舟便で資材を運び職人も往来し、仕事にも近隣町村へ出掛けた様です。

海運が衰退し、北前船での運搬が陸路に変わり、由良にも鉄道が来ることになると、由良は観光（海水浴）と勤め人とで経済を持たすべく、観光では当時の村長以下、京都に関係のある府会議員や京都の学校出身者など関係者は京都市内へ海水浴場としての由良を売り込みに行きました。

海岸には京都西陣、室町、寺町の商人の別荘が何軒も建ち、京都市内の女学校の臨海学校を受け入れ、全村で民宿を推進し、民宿可能な家は全面協力しました。観光客用に銭湯、ミルクホール、玉突き屋、かき氷屋、うどん屋、ダンスホール、浜茶屋、駄菓子屋等々。

由良川では漁師、さけの孵化放流、うなぎの養殖、鮎（えり）、魚釣

り舟。農業ではミカン栽培、夏の観光客用のすいか、梨、桃の栽培。地区民各々に自分の力相応に仕事を考え、仕事を作り、それを実行することで自活の道を探し、職人として海軍工廠へ勤め、他方、教育の重要・必要性を認識して由良小学校では由良教育を実行し、優秀なスポーツマンと頭脳人材を輩出したようです。

海に関係した人達はアメリカへ働きに行き、自動車を持ち帰る。南洋といわれたミクロネシアへ行き、真珠の養殖、ゴム園の経営等々、海外への進出も果たしました。石屋、大工さんは朝鮮、台湾で成功した人も有りました。小学校の理科室には南方へ行かれた方からの寄贈の珍しいはく製等が有りました。

あれやこれやは昔の話、物語となってかすかに残っています。その由良の気風、自治、自活の由良人の活動はこの合併で完全に消えたと思っています。

失礼ながら空白の五十年、もう落ちる所まで落ちた由良をどうするか年代を越えて考える組織から構築する必要があると思います。

由良小学校の児童は40名を切ったとか、将来どうするか？子供の声の聞こえない地区に将来は無いと言われます。最後の最後まで学校を守り続け、児童の増える方策を地区全体で取り組めるのか？等々を思いつくままに記しますと

＊老齢化は待ったなしに進み人口減になるが、その老人が元気に行動できる諸施策の計画やリハビリ設備が出来、他地区からも利用に由良へ来てもらえる設備と計画が望まれるが如何にすれば実現できるのか？最悪小学校が廃校になった時、老人対象の健康増進とリハビリ、老人大学としての教育施設になり、時事文化教室や音楽等情操教育室、健康増進とリハビリの雨天体操場、グランドゴルフやゲートボール場の運動場。老人ボランティアによる給食や喫茶室、教師と介護士とリハビリ指導者、経験者はみんな協力する…こんな事が出来ないか？出来る方法で絵を描いては。

＊由良にもやっと診療所が出来たので診療所の先生の協力を得て健康増進設備の計画は出来ないか？

＊由良の山や農地を活用する方法は無いのか？農地付き住宅の提供は出来ないのか？

＊空家の有効活用方法は無いだろうか？ネックになっている事は何だろうか？

＊健康、安全、それと一体の観光が既存の業者の協力で作れないか？

等など出来ない理由で無く、どうすれば出来るか考える事から始めては如何か？

さて

その中心になるのは「誰が、」「どの組織か」結果を恐れずに行動して欲しく思います。

地区の老齢化と過疎化と共に由良の昔話は消えて行きます。由良の生活（男衆は海へ出るので女子衆が刺し子のどてらを着て守り作った由良の風習）や船頭物語（金毘羅さんに浪速物語）、由良石や石屋さん、宮津線が出来た時の由良川鉄橋物語、福知山との往来をした高瀬舟やプロペラ船。楽しく、苦しく、暗く明るいロマンス、地区民の生き様と風習等々を今残して置きたく思います。又機会が有れば聞き物語を書きたく又どなたでも書いて欲しく思います。

（二〇一〇、一）

絵：みもり　あきら

# 子供料理教室
# クリスマスケーキ作りに参加して
## (感想文を転記)

**六年　稲垣卓哉**

今日のクリスマスケーキ作りをしての感想は、最初ケーキは失敗すると思っていたけど階段のようにケーキができてよかったです。生クリームをつくるときが一番大変でした。

そして昼食を食べての感想は、ハヤシライスはトマトの味がきつくなかったので食べやすかったです。それでぼくのきらいなツナサラダも今日は食べておいしかったです。

**六年　せ戸野　ゆう太**

ケーキ作りでホイップ作りはたいへんだなあと思いました。

自分たちでケーキを作って食べているのがたのしかったです。

昼ごはんもおいしかったです。

今日はほんとうにたのしかったです。それとおいしかったです。

**六年　蒲原穂香**

ケーキ作りをして、一番良かったのは、チームワークです。

みんな休まずやってくれました。形は悪くなったけど、おいしそうやとみんな言っていました。私も形よりも味だなと思いました。自分達で作ったケーキは、やはりおいしかったです。

お昼ごはんも頂けてうれしかったです。ハヤシライスもサラダもすぐ食べれたし、みかんもあまくておいしかったです。

今日はおいしい物をたくさん食べさせてもらいました。

最高でした。

**六年　白矢翔吾**

みんなで協力してケーキ作りができました。生クリームを作るときは重くてまぜにくかったけどうまくつくれました。

かざりつけはあまりきれいでなかったけどおいしかったです。

さいごのケーキ作りで思い出になりました。

**六年　中西拓海**

今日は最後のケーキ作りでした。ケーキ作りでは、ぼくは生クリームを作りました。その間ぼく以外の班の人がうまくフルーツを切っていてくれました。

そして生クリームができてスポンジにみんなで仲良く生クリームをぬれました。フルーツをつけるのもうまくつけれて良かったです。みんなで食べてたらすごくおいしかったです。

最後のケーキ作りは楽しかったです。

**五年　田村はるな**

楽しかった事は、くだ物を切ったりクリームをぬったりするのが楽しかったです。

完成したとき、おばさんに「上手や」と言われてうれしかったです。食べたらおいしかったです。

お昼ごはんはハヤシライスがおいしかったです。おなかいっぱいになりました。

今日は楽しかったです。

**五年　中西美優**

今日のクリスマスケーキ作りはとても楽しかったです。

ケーキは山もりになっていました。でもきょ年よりはうまくできてよかったです。

お昼ご飯はとてもおいしかったです。でもみかんを食べるとてもおなかいっぱいになりました。

今日は楽しい日になりました。

# 川柳・その他

## 川柳

宮津番傘川柳会　大森美智子

あんな日もあったと
ビデオ巻き戻す

鍵っ子が帰るながあい
影つれて

ただひとつ僕の味方は
影法師

試験場みな秀才に
見えてくる

明日吹く風にすべてを
任せよう

ロボットに遂に辞表を
書かされる

赤い薔薇に刺された傷は
治らない

## 俳句

水引草（由良出身）

口紅の
底かきさらえ　一葉忌

八十路過ぎ
余生無欲に　枯葎

喪にありて
隙間だらけの　年迎ふ

## 短歌

山口幸一

街角に、喪服の人とすれ違う
死とすれ違いたる如きたまゆら

又読みぬ坂の上の雲　国あげて
夢を追いたる明治のまぶしき

三万の自死者はたゞに数となる
其の悲しみを思う人あれ

自死三万十二年つゞくというに国会は
政治と金に明け暮れている

世は移り朝々顔出す殺の文字
言葉うしなう戦なき代に

苦しみを避ける思想の果てにして
今日の苦しき選択に逢う

貧しさに培われたる力いまぞ知る
異邦の力士ら土俵を席捲す

瓦礫の街ら吾子を抱く
ハイチの母の光りなき顔

## 折り込み都都逸

坂本妙子

なかよし
な　泣いて笑って
か　肩寄せ合って
よ　良い友を持つ
し　幸せよ

かけひき
か　垣根を越えて
け　気高く匂い
ひ　人引きつける
き　金木犀

おしまい
お　大きな夢を
し　しっかり抱いて
ま　真っ直ぐ私
い　生きて行く

## 独り言

坂本妙子

雲よ、白い雲よ
青空を駆回る雲よ
その雄々しさを
ちょっぴり私に貰いたい

雲よ鉛色の雲よ
ずっしりと重たい雲よ
其の悲しみは
ちょっぴり私を暗くする

雲よ黒い雲よ
涙を流す弱い雲よ
雨をふらせて
ちょっぴり私を慰める

雲よ夕焼けの雲よ
人々の心を優しく染める
その美しさに
ちょっぴり私を忘れたい

雲よそれぞれの形して
雲よそれぞれの想いを持って
何時も何かを呼び掛ける
寂しい時も悲しい時も

そして又楽しい時も
雲に向かって叫びたい
大きな声で

# 安全・安心の町、由良を目指して

由良駐在所　村田浩至

由良駐在所に赴任して約3年が過ぎた。

未だ学ぶことが多い中、私なりに地域の安全・安心を考え、力を注いできた。

由良、石浦地区は海水浴場等を抱え、観光客で賑わいを見せるが、年間を通して事件事故は比較的少ない平穏な地域である。

この平穏な地域で昨年11月下旬から、静寂を乱す事件が発生した。

石浦地区において「新聞が盗まれる」という事件が連続して発生したのだ。

新聞配達の時間は決まっており、また、犯行は同一の場所で行われていることから犯人を逮捕すべく早朝の張り込みをおこなった。

しかし、連日の張り込みも虚しく、犯人は一向に現れない。

12月の下旬になるころには、この「新聞が盗まれる」という被害に加えて「倉庫の荷物がなくなる」、「倉庫内の冷蔵庫から食材が盗まれる」と、その犯行も段々とエスカレートしていった。

犯行時間もまちまちで、時間帯も特定することができない。

普段からパトロールしていても不審者を見かけないことから焦りだけが募った。

犯人の逮捕に向けた捜査は難航を極めたが、私も、この地域の安全と安心を守る駐在所員としてのプライドにかけ、この「姿の見えない犯人」を必ず逮捕すると決意し、昼夜問わずの捜査を行った。

最初は暗中模索の状態であったが、必ず捕まえるという強い心を持ち、犯行の実態を分析するため付近を検索、周囲の状況の確認を地道におこなった結果、若干であるが犯人の影が見えてきた。

そして、寒さ厳しく、真っ暗闇の早朝から張り込みを行ってきた結果、平成22年1月28日の早朝、駐車中の車の中から食品を盗んだ男をその場で現行犯逮捕することができた。

犯人も抵抗し、必死で逃走をしたが、本署からの応援もあり、見事、検挙できた。

多くの人は、凶悪な犯罪に遭遇することはなく、一生を犯罪被害とは無縁で過ごすことから「自分には関係ない」、「所詮、他人事」、「テレビの向こう側の話」と思っているかもしれない。

私は、この事件を取扱い、「地域の不安を解消することの重要性」、そして「地域の安全・安心に応える必要性」を再認識した。

犯罪被害とは決して他人事ではない。

当然ながら警察は犯罪の未然防止、犯人検挙に全力を注ぐ。

何よりも一人ひとりが犯罪被害に遭わないために防犯意識を高める必要がある。

今回、石浦地区で発生した事件の犯人を決して許すことは出来ないが、「防犯の重要性・防犯意識の向上の必要性」を考える上で、非常によいきっかけになるのではないだろうか。

今後は地域の防犯力を最大限に発揮することで、防犯意識と防犯対策の更なる高まりを図れるよう、今まで以上に「真に地域に密着した警察活動」を、行ってまいります。

そして地域の皆さんとの協働活動を積極的に推進するとともに、地域の実態に応じた安全情報の提供に努め、安全・安心な由良の町の実現に尽力してまいります。

# 成人になって

儀本　みなみ

今年成人式を迎えることができました。成人式を迎えた者全員が平成生まれとなりました。

成人式を迎えたといっても、私はまだ学生。それも家から通学しています。片道2時間弱かかりますが、帰りの列車の窓から見える山ばかりの風景から海が見えてくるとなぜかホッとします。列車を降りると潮の香りがします。由良に住んでいたらわからなかった香りです。高校時代寮生活をしていたので「潮の香り」に気づきました。

私はやっぱり由良が好きなんだなと思いました。由良ヶ岳から見下ろす由良の町並みや海岸。そして温かく人情味ある住民の方々。私が知らない方でも朝出会うと「行ってらっしゃい。」と声をかけてくれます。家にいても近所の方々が、「今日は学校休みか？」と気楽に話してくれます。

そんな大好きな由良ですが、不安なこともたくさんあります。小学校の統廃合問題。一人暮らしの方が大勢いること。空家が増えていること。そして同級生がいないことです。

でも、成人式の日だけは、賑やかでした。着物姿やスーツ姿、いつもの格好とは違っていましたが、久しぶりに友達に会い、楽しいひと時を過ごすことができました。

正直に言うと成人式は欠席するつもりでしたが、成人式実行委員会のメンバーに入れていただいたこと、母の着物を着てみたくなったこと、周囲からの勧めがあり参加することになりました。「成人」としてのスタートをまじめに考える機会となりました。

二十歳になったから大きく変わるものは社会的・法律的に責任が求められるということ。直ぐには変わらないけれど変えていかなくてはならないものはたくさんあります。今までの自分を見つめ直し、新たな自分を探してさまざまな物事に取り組み、考えや視野を広げていきたいと思います。

由良で育った誇りと、時を共に過ごした仲間との思い出を胸に、今まで育ててくれた母や家族、地域の方々に感謝の気持ちを忘れず、地域に貢献できるよう夢に向かって前進していきたいと思います。

とりあえず、「成人」として、TPO応じた行動ができるよう努力したいと思います。地域の皆様、今後ともご指導のほどよろしくお願いします。

# 成人を迎えて

北野　晃次

私は、平成二十二年一月十日成人式に出席してきました。

久し振りに再会した友人達はみんな変わらず、しかし、スーツや着物を着ていることもあってかどこか大人びたような、そんな印象を受けました。

式典が始まり、市長や来賓の方々の祝辞を聞いていると成人としての自覚をしなければいけないと思いました。

私自身は既に就職し社会に出て働いている身ですが周りの友人達は、大学に通っている者、就職活動に勤しむ者と様々ではありますが、数年後にはみんなが社会に出て働いていくことと思います。

社会に出るということは自分の行動一つ一つに責任を持ち、社会の中でのルールをしっかりと身につけていかなければなりません。

これは自分の経験上の話になりますが、社会というものは自分の思っていたよりもずっと厳しく、辛いこと、大変なことがたくさんあります。しかし、そんな中で過ごしていくことが、結果として自分自身を高めていってくれるものだと私は思っています。

みんなそれぞれ将来の目標というものがあると思います。これから先、その中で時に壁にぶつかり、挫けることもあるかもしれません。そんな中で成長していってこそ、大人というものになれるのかもしれません。

今後はもうこのように友人達と会うこともないかもしれないですが、もし、またみんなで会える機会があるのならば、より成長し自分にもっと自信を持って会えるよう、今後のみんなの頑張りに期待すると共に私も努力していきたいと思います。

絵：みもり　あきら

# 平成二十一年度　北方四島ビザなし交流訪問事業（北連協主体の船）参加雑感（Ⅰ）

全自父　京都府連合会
団体職員　岸　田　博　司

## 一、「ビザなし交流」とは

平成四年から実施されている北方四島（択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島）との交流事業は、私たち日本国民が父祖伝来の地として受け継いできた島、歴史的にも国際的にも我が国固有の領土であり、旅券（パスポート）、査証（ビザ）なしで外務大臣の発行する身分証明書、挿入紙により渡航が認められていることから「ビザなし交流」とよばれています。

（交流実施は平成二十一年七月六日現在、日本側訪問団二百九回、八、八五三名、四島側訪問団受入百四十六回、六、六九一名となっています。）

## 二、交流団員に選ばれた経過

本年度は、入国カード問題で二十一年五月に予定されていた北海道からの訪問が中止となり訪問が危ぶまれていましたが、この問題は日露両国間でクリアーでき、予定どおり訪問する事ができるようになりました。

この事により、私には五月末日に北方領土返還要求運動連絡協議会（略称・北連協）から『貴方様は北連協加盟団体の代表として「ビザなし交流団員」に選ばれ、国後島、択捉島の両島を訪問していただきます。』と団員決定の『お知らせ』書類を頂きました。

その後、六月中旬には、独立

法人北方領土問題対策協会（略称・・北対協）から宅配便にて、北方領土関連の資料や、北方領土『入域』に必要な関係書類一式を送付して頂き、大変助かりました。京都の宮津や、丹後の由良には北方四島に関する書物が販売されてなく、資料がなく困っていたところでした、熟読して、勉強させて頂きました。根室での事前研修会でペーパーテストがあるとの事でしたので、事前勉強する事も出来ました。

（北方領土は終戦直後の一九四五年八月十八日から次々とソ連軍に不法占領された日本固有の領土です。したがって北方四島に行く時は、「出国・入国」の用語は使用しません。ビザなし専門用語で『入域』すると言います。）

**三、「北連協主体の船」の乗船人員と団員推薦の範囲**

私が選ばれた今回の交流団は通称「北連協主体の船」と呼ばれ、北連協加盟団体（私の場合は全国自衛隊父兄会から二名が推薦され二名とも選ばれていましたが）その他の加盟団体から選ばれた、返還運動関係者、及び北方領土元居住者並びに国会議員、医師、報道関係者、通訳、事務局員等、総勢は団長を含め六十五名（男性四九名、女性十六名）でした。私は、今回が初めての経験で、ほとんどの方とは初対面でしたが、皆様は各加盟団体から推薦され選ばれて来られた方々で皆その道の権威者で素晴らしい識見、技能、知識を保有されておられる方達ばかりでした。後で感じたことですが、訪問団員の人選も実にバランスよく選抜されており、よくここまで適任者を選ぶ事ができたものだと感心させられました。当団員の多くの方達と話をさせて頂き、又名刺交換もさせて頂きました。お陰様で実に多くの北方領土に関する知識を得る事ができました。私自身も不勉強で内心忸怩たる思いでしたが、この出会いを大切にして、今後さらに友好、交流の輪を広げていきたいと考えております。そうする事が、より多くの国民に北方領土問題に関心を持ってもらえることになり、返還運動を推進するパワーになると考えます。

**四、交流訪問に参加して感じたこと、時系列的な私的見解（雑感）**

（一）、訪問期間

平成二十一年七月六日（月）～七月十日（金）（四泊五日）

（二）、日程

根室集合(根室グランドホテル)七月五日（日）

（当日は、航空便の都合で根室到着が遅くなるため、根室に宿泊する

帰路は七月十日に航空便の釧路から羽田に間に合わないため根室グランドホテル宿泊を事前予約とした。）

七月五日　朝七時三分　宮津発→電車・バス乗継→伊丹空港発

十時三十分→ＪＡＬ羽田着

羽田発十二時五十分→ＪＡＬ釧路空港着→バス・電車乗継→根室着十八時五十四分→根室グランドホテル着十九時十分（交通の便が悪く片道約十二時間を要する。）

当日の受付時間は　十五時三十分～十八時三十分であり、時間が過ぎていたため、翌朝の受付となる。

（三）、事前研修会集合（千島会館）

七月六日（月）八時三十分

天気：晴れ

七月六日朝、根室グランドホテルの横にある、千島会館にて手続きを済ませ経費を受領する

（自宅の最寄り市町村役場から根室までの往復交通費と七月五日の宿泊費）北対協旅費規定に基づくものであり、有難かった。

八時四十五分バスに乗り（ニ・ホ・ロ）に向かう

（四）、結団式と事前研修会

日時七月六日

午前九時～午後二時五十分

場所：北方四島交流センター

（ニホロ）交流ホール

結団式は主催者挨拶、来賓挨拶（長谷川俊輔・・根室市長）、団員挨拶・・六十五名全員が自己紹介、団長（山口洋子）日本労働組合総連合会・・副事務局長挨拶で粛々と執り行われた。

事前研修会の内容は　①オリエンテーション（事務局）②ビザなし交流事業について（山村嘉宏・・外務省ロシヤ課企画官）③国後島、択捉島の現状と自然―スライド　④昨今の北方領土の状況（児玉泰子氏、小城春雄氏、山田吉彦氏）

昼食（弁当）を頂き館内を見学する。

資料室は時間がなくゆっくり見学する事ができなかった。

午後は　⑤島内行事（漂流物調査（国後・択捉）、墓地清掃（択捉）、交流イベント（国後・択捉）、対話集会（択捉）についての説明、

⑥ロシヤ語講座（講師・・大島通訳）等で充実した事前研修会でした。事後の訪問の参考になった。

午後二時五十分（ニ・ホ・ロ）を出発してグランドホテル前で買い物（船酔い止め薬、水等）すませ根室港へ向かう。

（五）、国後島へ向け出港

七月六日（月）天気　晴れ（午後四時二十分）

渡航手段は、船舶『ロサ・ルゴサ（４８０トン）』である。

船長の説明によると、ロサ・ルゴサとはラテン語で北海道の花「はまなす」のことであるという事である。

団長の出発挨拶、荷物の積み込み、団員名簿番号順に乗船する。

長谷川根室市長その他多くの関係者の見送りを受けて、根室港（琴平町岸壁）から出港しました。

予定通り出港から概ね４時間後に現地時間（時差・＋２時間）の午後十時三十分に国後島の古釜布湾に到着しました。投錨され上陸せずに（船内泊）です。

島内に宿泊施設がないためか、或いは許可？がいるのか判りませんが、

ビザなし交流訪問団員がこれまでに上陸して宿泊した例がないそうです。

北連協の船ロサ・ルゴサは小さく、部屋も狭く、２段式ベッドで５人の相部屋で窮屈でした。トイレも少なく、シャワーはあるが風呂水は海水でした。もし可能であれば、宿泊施設を建設して入浴、炊飯、トイレ等も完備して、そこで宿泊できれば、艀から上陸、帰船する時間的ロスタイムを短縮する事ができ訪問時間を有効に使用出来るのではないかと思いました。

つづく

## 平成二十一年度 宮津市人権標語コンクール入選作品

優秀賞　栗田中学校　二年　岡野永莉

大切な　言葉を刃物に　変えないで

佳作　栗田中学校　一年　枡岡佑奈

傷ついた　心にそっと　ばんそうこう

# 思い重ねて、横濱市中區の谷戸坂の櫻、に出逢う

濱野路　大森　孝

**一、まだ見ぬ『港の見える丘』**

公園の櫻が占領下の私の青年の夢を支えつづけた。

不思議なものである。どう表現したらいゝのか、16才で敗戦を迎えて、郷里由良へ復員してきた少年の私が、『港の見える丘』…の歌謡曲の虜になるのには、それ程暇がかからなかった。いつしか、『チラリ　ホラリと花弁…、あなたと私に降りかかる　春の午後でした。…』

『貴女と二人で来た丘は、『港がみえる丘』、色あせた櫻、淋しく咲いていた。船の汽笛、むせび泣けば…』。外濱で大盛り上りの製塩に、飯野港運の営む砂濱に海水を撒いて、濃くなった砂をかきあつめて、松原近くで煮沸する。肉体労働に従っている時折、いつしか口の端にのぼってくるのが、誰だったか女性歌手が歌っていたこの曲だった。あてどもない、先の見えない労動であって、然もその頃の由良では猫も杓子も、製塩にうちこんでいた。大盛り上りの塩仕の激務に従事し乍ら、混迷の少年は思いがけない精神の支えを、この歌からもらっていた。直面するたつき。将来の進路の選択に迷いつつ、まだ見ぬ『港の見える丘』色褪せた櫻を勝手にイメージして、この横濱の一本の櫻への関心を深めていた。

**二、石川町駅（根岸線）より山手本通りを通って**

『港の見える丘』それの見始めはなんと私は55才。

期待した櫻の姿は、丘のはずれ、フランス山の入り口近くにあった。丘の上には『ＫＫポートビル』のしょうしゃな建物が公園を見おろす末端のくぐまったような場所にみつかった。恐らくは二代目なのだろうか、見映えのしない、細そりした木で、曲っていた。失望を感じながらも、探し求めた曰くの幹だけに沁みじみと見やった。

この初体験は、娘が昭和58年川崎市の『東芝』の社宅から、横濱の神奈川區の神奈川中学、崖下のマンションに住んだことに始まる。こんな奇縁が思いがけない出逢いとなって、いささかの感懐を覚えた。

その時は、止むなくフランス山を迂よ曲折しながら谷戸坂下の、これもフランス領事元所管の一角に辿りついた。

雑木の合間から垣間見る、問題の豊かな櫻並木は殆んど気にとめずに、『谷』をはさんで、向い側の坂道は知らぬ半兵衛然として降り切った。然りとて、向いの櫻並木は『旬』に当れば、樹の高さもあって、見映えのする、心踊らす壮観である。春到れば“らんまん”の花の彩りをみせてくれる。崖っぷちの大きな居宅や倉庫？やテナント館などの間を、縫うようにして聳えている、樹立ちが華やかで見事な筈なのだが

**三、花の季節にめぐりあえて**

あれは娘の居宅が栄區の飯島町に移って、妻やら娘と三人で大船駅で、根岸線を『山手駅』で降りて、始めて山手の尾根を行こうとした。由良の親友故玉垣肇君のご親類が、フェリス女学院へ学んでいたということもあって、『山手』でおりてみた。道を迷いながら同高校の前を通り過ぎる。

途中、元町公園そばのエリスマン邸の外のベンチで、携さえた昼食をひろげた。隣りにはチビッ子二人をつれて、欧米人の若い両親が坐って談笑している。頭の上を覆う枝を、思いっ切り伸ばして花をつけた一重の櫻がハラハラと散ってくる。ふ

と、私はその時　谷戸坂の崖に連なる花はどうだろうか。と気になり出した。妻娘づれだったので展望台をまわって、公園も見て、幼な馴染の歌謡曲『色褪せた櫻』はもうどうでもよかった。…歌謡曲『港の見える丘』は青銅の記念板として、市の設置があった。歌が流行って、60年経つ。

やっと〝谷〟の山麓を飾る櫻花の隊列を鑑賞することができた。この春、耐えて開いた櫻花、そんなにあでやかというのではないが、（たとえば美作津山城跡の櫻の絢爛さ、備中高染市の川沿いの、橋にも映える山櫻の落着いた趣きはないかもしれないが、）私のこだわった坂道の櫻花の風趣　そんじょそこらにある櫻でも季節のたよりを届けてくれた。言うことなし。味わいたっぷり。（現在は旧日本冷蔵跡地付近が東急東横線の『元町ストップ』となって、谷戸坂下が元町への北の入口（地下鉄）となっている。）

平成22年1月8日記

# 若狭越前海岸を歩く（No.3）

港　四方俊一

「永正の反乱」永正十四年（一五一七）丹後守護は一色義清であったが五月二五日、守護代（一色義清の守護代）延永春信（修理進）は一色一族の一色義信（九郎元清、峰山吉原城主）を擁立して一色義清に対抗し、若狭国の逸見氏（高浜城主）と手を結び若狭国の国境まで進撃した。この時は、一色義信（吉原城主）と逸見河内守（高浜城主）延永春信（一色守護代）が結束し、一色義清（丹後守護）武田元信（若狭守護）朝倉孝景（越前守護、元信娘婿）と合戦になった、しかし逸見氏は八千騎をもって合戦したが小浜の西津で討死したのであった。そして延永は倉梯城（東舞鶴）まで撤退し武田勢に攻められるのである。延永は降参し城を出、武田元信と一色義信との間で和睦が成立した。又、武田方の家臣栗屋元隆の勢力が大きくなった時期にあたります。そして大永元年（一五二一）丹後国一色勢、海路より若狭沿岸の漁村を荒らす海賊を行った。このことは「丹後海賊」として子孫に語り伝えられたと云う。丹後海賊は遠く越前海岸の漁村に達していた。その後数回に及ぶ海賊行偽は武田側からも加佐郡を中心に海賊が行われている。この年の暮、若狭守護武田元信が没し、武田元光が十八才で家督し、後瀬山（JR小浜駅裏山）に城を築き、丹後と若狭の対立が強くなってきた。大永六年（一五二六）には丹後勢が若狭を攻め、翌七年には若狭沿岸の漁村を海賊で攻めるが敗北し、逆に武田勢の浸入を受け由良浜（由良浜）では白石光胤が戦った…と云う。天文二〇年（一五五一）若狭国守護武田元光が二九才の若さで没し、武田信豊が家督した。信豊は直に丹後国一色勢を攻めるが仲々攻めきれなかった。そうこうする内、弘治二年（一五五六）に武田信豊が没した、わずかに六年間の守護職である。（義統家督）この時丹後守護は一色義幸で盛んに若狭攻撃を進めていた、中央では永禄元年（一五五八）尾張において織田信長が勢力の拡大を計ろうとしていた。又信濃（長野）においては上杉謙信が武田信玄と塩尻（長野）において死闘を続けていた。この年丹後では一色義幸（義清）隠居して一色義道（藤長）が家督し、七百余騎を持って若狭の佐分利（大飯町青郷）に乱入し、逸見、栗屋連合軍は加佐の吉坂山に破ったのであった。

その翌年永禄四年（一五六一）武田義統の家臣、逸見、栗屋、内藤、熊谷が義統に背くが武田勢の攻撃に絶えられず高浜城から退去せざるを得なかった。一方越前の朝倉氏は越後の上杉謙信と盟約を結び、若狭を伺うこととなる。永禄六年（一五六三）九月二日、敦賀の朝倉勢、若狭国美方郡佐柿国吉城を攻撃する。国吉城主栗屋越中守配下の山東十郎・田辺半太夫らが佐田（美浜町国道二七号線と敦賀半島への分岐点）附近で防戦して退けた。永禄七年（一五六四）常陸国（茨城県）から丹後へ来た弘伝上人が弓木城主稲富一夢斉（一色家臣）は砲術を学んだ、それが稲富鉄砲術として後々の世に伝わるのである。一色方が敗れた後、細川藤孝の家臣となり、後の彦根藩井伊家に仕え徳川家康に仕えることになる。そして現代の愛知県三河花火として伝わっているのである。この一色家臣の稲富鉄鉋は一色家を守る最大の武器であった。さてさて話を元に戻そう、永禄十一年（一五六八）四月九日武田義統没し、武田元明（八才）で家督する。そして十一月武田の家臣、逸見、栗屋、熊谷らが元明に従がわなかった為、朝倉勢は小浜に侵入して武田元明を捕え越前国一乗谷（福井市一乗谷）に妻「竜」（京極高知の妹）と共に移ったのであった。元亀元年（一五七〇）四月、織田信長は朝倉義景を攻める為佐柿国吉城に入った、武田の家臣であった逸見・内藤・熊谷・栗屋・山県・下野・臼井・松宮・寺井・畑田・香川等は信長に従ったのである。浅井長政、将軍足利義昭、朝倉義景の粉争は続くが天正元年（一五七三）八月朝倉義景が信長に敗れ、浅井長政も敗れるのであった。一乗谷から武田元明旧臣の栗屋、熊谷の助力で若狭へ帰国し、小浜神宮寺に入るのである。その時の小浜城主は織田信長の家臣、丹羽長秀が入っていた。小浜城と云っても後瀬山の山城である。天正三年（一五七五）一色義清没す。この時家督した一色義直（藤長）は織田信長の越前一向一揆討伐に出兵し、加佐郡の水軍を率いて参陣し越前の浦々の湊を攻めている。天正四年（一五七六）、前年迄織田信長に追従していた丹後勢の中に東進する反織田連合の最大勢力、毛利氏と接触する動きが見られ始めた。織田信長は百戦練磨、天下統一を進めてきたがこの動行に鈍感であるはずもなかった。これらの情勢は細川藤孝によってつぶさに報告がなされるとともに織田信長の丹後へ寄せる警戒心と討伐の下心を感じさせるようになっていた。天正五年（一五七七）織田信長と毛利氏、本願寺一向一揆、上杉氏は戦闘を続けた。前将軍足利義昭（慶長二年一五九七大阪で没す）・毛利輝元（毛利元就の孫、豊臣時代五大老、関ヶ原合戦で西軍の主将）・上杉謙信の共同謀議の結果、四月には毛利勢が播磨室津へ（兵庫県南西部）まで進出、また九月には上杉議信が能登七尾城（石川県七尾市）を攻略、加賀湊川まで出撃して、織田信長にとって戦局の困難は頂点に達していた。けれども、彼は反織田連合勢力の各個撃破に全力を注ぎ、八月、柴田勝家・羽柴秀吉に加賀、十月、羽柴秀吉に播磨、明智光秀、細川藤孝に丹波へとそれぞれ派兵を命令している。そして同六年になると三月に上杉謙信が卒中で倒れて急死、その家督をめぐり上杉家に

絵：みもり　あきら

内紛が生じ京都を目指す進軍は停止し、又、天正六年(一五七八)六月には織田信長が九鬼嘉隆(三重県志摩水軍)に命じて建造させた鉄船(鉄板で装甲、大鉄鉄鉋を装備し七隻が大阪湾に入って制海権を握り、石山城(大阪城)と毛利勢との海上連絡を遮断して本願寺一揆を衰弱させる等、織田信長は漸く活路を見出し、戦局を有利に展開することが出来る様になった。このような戦局の好転のもと、織田信長は反織田連合に繰り込まれ、織田勢包囲網の一翼を担う結果となった丹波、丹後地方に対して自ら出征の意向を表明したり、又、明智光秀と細川藤孝を遣わし本格的な攻略を開始するわけであるが、そうした状況の中で丹後勢に織田方へ内通する者も表われたと考えられる。天正六年(一五七八)九月、織田信長の新造鉄船観閲に随伴した一色氏は同族の一人で確認出来無い一人であった。又、天正七年(一五七九)六月織田信長に「雛集」を献上した松田攝津守(竹野郡黒部村城主、一色家臣)は松田定頼であり、明らかに内通者と疑われた。明智光秀等織田軍の丹波攻略で天正六年四月に園部城、九月に馬堀城(亀岡市)、翌七年五月に八上城(兵庫県篠山市)、八月に黒井城(兵庫県春日町)がそれぞれ陥落し、七月但馬国に於ける、毛利派国象へ梃入れの為、但馬に布陣していた吉川元春も九月には伯耆(鳥取県)羽衣石城(東郷町)城主南条元続が織田信長に通じ離反した為、急拠撤兵することとなり、丹波、丹後地方勢は毛利氏の支援が断たれて孤立状態になった。細川方、明智方は大軍をもって八田山城(舞鶴市喜多、建部山城)を落城させるべく策を練る。初めに八田城の周辺の属城を次々と落城させ降参した多くの武将を皆家臣とし一色方の郎党を分断して傘下に入れ、巧みに利用したのである。年明けて天正七年(一五七九)一月二〇日、一色義道遂に戦い負けて近くの中山城(八田八雲橋正面)退りぞいた。中山城の東側は急坂の上、周囲は腰を没する深田に守られ、反対側(西側)は山頂から由良川まで急勾配の自然の要害である。城主は「沼田幸兵衛」。沼田氏の祖は、藤原秀郷(下野、栃木県)の末裔で上野国(群馬県南西部)沼田庄(沼田市)の守護職として存在した藤原家であると云う。その子孫が若狭国熊川(福井県上中町)城主となり将軍足利義輝の側近として仕えたのであったが永禄八年(一五六五)五月十九日、足利義輝(三〇才)は三好義継、松永久秀等によって殺されたのであった。その時家臣であった沼田氏は熊川城を焼かれ一族は丹後宮津日置城(一色方の城)に逃れた。そして中山城主となっていた。故に一色氏には大変な世話になっていたが沼田幸兵衛の妹が細川藤孝の正室となって居り、細川方の信頼も厚いものがあった。故に一色義直が中山城に逃れた時、直ちにこのことを細川方に急報した。細川方では早速評定の上、細川忠興以下総勢一万四千七百余人、二手になって押寄せた。城方も一色義直の陣代大江越中守以下四千七百余人が死力を尽くして防戦したので、死傷者も多く、二日二夜攻めてもビクともしなかったと云う。細川方の将「松井興長」は「城に忍びを入れて火をかけん」と提案して沼田幸兵衛の了承を受けた、沼田も松井が指図に任せ、夜更け人静まりて火をかけ、これを合図に敵を引き入れた。細川勢思いのまゝの夜討が成功した、一色勢は総崩れとなり大半は戦死、大将一色義直は由良川の浜まで逃れ出たが大勢に取囲れて自刃して果てた。その時、嫡男一色義俊(五郎)は大船峠(下東)に陣していた、急を聞いて馳せつけ奮戦したが及ばず、由良川

を押渡り七尾峠（奈具海岸山中）越えで与謝弓木城に逃れた。細川藤孝は弓木城を攻めるが城主稲富一夢斉の鉄砲に歯が立たず攻め切れなかった。そこで細川藤孝は天正八年（一五八〇）八月、一色義俊と和睦して宮津大窪保城・八幡城（宮村）に入り織田信長から築城の許可を得たのであった。天正九年（一五八一）浜手の宮津城完成し、五月には和睦の条件の一つ細川藤孝の娘「伊也」と一色義俊の婚礼がなされた。伊也は細川藤孝の三番目の娘で明智光秀の仲人と云われている。天正九年三月二六日、逸見昌経が没した。武田守護のもと若狭に入って以来百四〇年余りにして絶えた、遺領一万一千石は武田元明に与えられた。そして天正十年十二月十三日浜手（鶴賀）に宮津城が完成した。ところが天正十年六月二日大変な事件が起きた。明智光秀が京都本能寺で織田信長を襲い殺すのである。その明智光秀は六月十三日、羽柴秀吉に天王山（京都と大阪の堺）で敗れ、敗走途中、京都山科の小栗栖で土民兵に殺された。この時、細川藤孝は明智光秀に誘われるが許否したのであった。細川忠興は妻の玉を離縁して郷へ送り返すのが通常であるにもかかわらず味土野に幽閉してしまった。この年の七月十九日、明智光秀に味方したとして若狭の守護を務めて来た武田元明（二十一才）を近江国の海津（滋賀県マキノ町）の宝憧院で切腹させ、妻の「竜」（京極氏の出）を羽柴秀吉は側室とした。その側室竜は大変な美人であったがため秀吉の行動は早く武田元明を切腹させたのであった。又竜も京極家の為、秀吉に頼込んだと云われる。そのお陰げで京極家は発展し出雲へ栄転して行くのである。これを称して女の尻で出世したことから螢大名と称せられた。一方武田家は一四四〇年に一色氏を撃って守護になって以来、百四〇年余りで絶えたのであった。その年天正十年（一五八二）九月八日、一色義俊は細川幽斉に米田屋敷において誘殺されるのであった。細川幽斉（明智謀反以後幽斉と名乗る）は娘婿の顔が見たいと米田屋敷へ呼び寄せた、そこは米田屋敷であり、一色側弓の木城の諸将は評上の上、反対したが一色義俊は和睦した以上、叛くわけには行かないと云って供の侍三六人を連れて宮津城内に赴いた。米田屋敷の西側は大手川の堀、北側は松井屋敷、東側は有吉屋敷が有ったと云う、故中嶋先生の説明は更に続く。米田屋敷の北の部分に一色義俊の供侍三六人が待たされる、そして米田家の南の部屋は真中に仕切が有って、右と左に別れ一番下の南の部屋には仕手の者一七人を隠していた。いざという時に参入して一色義俊に切りつける要員であった。北側の八畳の部屋の北の所に一色義俊が、南側に細川忠興が座を取り、その右側に両方の持て成し役として日置主人（日置城主、もともと一色家臣、大江大和守秀久）が座ったと云う。さてさてご馳走が盛りたくさんに出て酒盛りが始まろうとしたその時、突然、細川忠興がサッと切付けた。そして南の部屋に居た細川側の仕手の者が切り付けて暗闇の中で切合いが始まり一色義俊は重傷を負ったのである。この事は如願寺谷の西側滝上山（二九三米）にある狼煙山から狼煙を上げ丹後一円に連絡し、弓の木城に雪崩れ込み「伊也」を連れ出した。現在丹後地方には当時の合戦の断片的な様子が伝承となって語り継がれているが諸城は相次いで陥落し、一色氏側はじめ国象は降伏ないしは討死して、守護一色氏がその領国として支配した丹後国は、遂いに細川幽斉の征服するところとなった。一色義俊は今の大手南角の屋敷にて自刃していた。

若狭、丹後の守護を受けて二百余年、連綿として丹後国主の地位を守り続けて来た。もちろんこの間に一時は但馬の山名氏に奪われ、あるいは応仁三年以来、約八十年間も若狭武田氏に守護職は移ったが、しかし事実上の丹後国主は依然として一色氏であり、その幾度かの武田氏の侵入も遂に一色勢力に抗し切れず、天文十七年（一五四八）の丹後浸入を最後に断念せねばならぬ程一色氏の丹後は強固に統一されていた。けれどもこの状態のうちにも天下の情勢、その社会の変化は刻々と新時代への道を歩み続け、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の時代に変って行った。さてさて、この永き戦乱の犠牲になったのが上宮津の「普甲寺」であった。多い時は百ケ寺在った僧坊は元中五年（一三八八）山名義幸、義満（但馬守護）が丹後を攻める時、戦場とした、そして応仁元年（一四六七）から三年に渡り一色義直と武田方の逸見宗見が戦い、以来九回にわたり戦場となり、大部分の寺院は破壊されて残るは僅かな寺院であったが元亀二年（一五七一）織田信長は一向宗、眞言宗、天台宗等の僧侶が逃げ込んだとして普甲寺を焼いた。今は普賢堂が静かに建っている。一人の僧侶が丹波から丹後に越す峠に僧堂を築き「東の叡山」に劣らぬ発展をしてきた寺屋敷、そして一色配下の山城「普甲城」が造られ、中世の武田氏と一色氏の争いが若狭、丹後、丹波の争乱に巻込みやがて衰微していった。次号につづく

参考資料

「細川時代の宮津」
「宮津市史」「丹後郷土資料集」
「丹後守護一色累代記」
「一色軍記」「丹後一色氏関係年表」

（子供料理教室）

## 編集後記

2010（H22）3月

暖冬という長期予報がはずれ立春をすぎても寒い日が続いています。インフルエンザ集団感染の影響も少なく小学校も学級閉鎖期間も短期間で児童達は元気で登校しています。成人式を終えた頃、中南米ハイチで大地震が発生、大きな災害になり首都機能を失い人道危機への懸念が高まり、復旧支援のため我が国も国連平和維持活動（PKO）への参加を決めました。いち早い復旧援助を実施してほしい。東南アジア集中豪雨・アフリカ干ばつなど地球温暖化が原因とされる災害により食料危機も叫ばれています。いつ起こるか分からない災害に対し備えをする姿勢が肝要ではないでしょうか。もうすぐ四月、駅前の桜も満開になり春を謳歌してくれます（枝川）